千葉大生の学習活動における大学附属図書館の利用実態調査

―学部四年生の卒業論文作成の支援を通して―

小西美智代
10E9013H

（指導教員：藤川大祐）

本研究は筆者が千葉大学附属図書館でALSA-GS(Academic Link Student Assistant-General Student)として働いてきた経験からテーマを設定した。働く中で、図書館と学生・教職員・一般利用者との間に起こっている様々な問題や課題に出会い、どうしてこのようなことが起きるのだろうか、なぜうまくいかないのだろうかと考えるようになった。これらの問題を少しでも解決したいと思い、本研究に取り組んだ。

1.問題の所在

「情報リテラシー」の育成が世界的に進められている。日本では、臨時教育審議会「教育改革に関する第二次答申」(1986 年)で「情報および情報手段を主体的に選択し活用するための個人の基本的資質」を表す言葉として「情報活用能力」が使用された。欧米では情報探索モデルに基づく情報リテラシー育成のための教育が義務教育段階で盛んに行われているが、日本では独自の文化に基づいた情報探索モデルが不在であることやコンピュータ・リテラシーとの混同など課題が多く、全ての学校で有効な教育活動がなされているとは言い難い。図書館では以前から実施してきた利用者教育を更に深めることでこれに対応している。特に大学図書館は､「学術研究活動全般を支える重要な学術情報基盤の役割」を担っている。これまでの情報の収集・蓄積・提供に加えて、利用者教育を積極的に取り組んでいる。

千葉大学附属図書館では、一年次の必修科目の「情報処理」のうちの 1~2 コマを用いた附属図書館職員による実習授業、レポートの書き方・各種データベース活用のための講座の実施、普遍科目のパスファインダー「授業ナビゲータ」の作成、機関レポジトリ(CURATOR)の運用、学習支援デスクの設置・運営など先進的な取り組みがなされている。しかしこうした取り組みは学生に有効に活用されているのだろうか。

2.研究の方法・目的

現在大学附属図書館が提供する学習支援が学生にどのような影響をもたらしているのかを明らかにする。また学生に対し、更に今後どのような支援が出来うるのかを明らかにする。

研究方法はアンケート調査とインタビュー調査及び実践の二つである。アンケート調査では千葉大学に在籍する全学部の学生 417 名を対象にし、大きく分けて 3 つの質問項目で行った。1.利用頻度・フロア、主たる利用目的、2.図書館が提供する学習コンテンツを「利用したことがある」「知っている」「知らない」の三段階による認知度調査、3.教養科目のレポートを書く際にどのような手段・情報源を用いているのか、である。

インタビュー調査及び実践では、千葉大学教育学部生涯教育課程の四年生 5 名にインタビューを行なった。この結果基づいて、卒業論文作成に役立つ大学附属図書館が提供する学習支援を紹介・体験するプログラムを実施した。その後、事後アンケートを行い、これらの支援が卒業論文作成に有効であるかを調査した。

3.アンケート調査の結果

回答者の八割が月に一度は大学附属図書館を利用すると答えており、図書館が身近な存在であ

ることが分かった。利用の目的のほとんどは自習
提供されている学習サービスの認知度は五割弱
の学生が知っている、または利用したことがあると答えている。しかし個々のサービスに着目すると差がかなりある。学習用端末の利用やグループ学習エリアが特に認知度、利用経験数で飛びぬけて高い数字を示した。一方で人的サービスであるレファレンスサービスや学習支援デスク、また図書館が開催し、学生が任意で参加する各種セミナーについては認知度、利用経験ともに大変低い。

レポート作成には文理・学年を問わずインターネットを利用する学生が最も多かった。

4.インタビュー調査及び実践結果

事前のインタビューから理系学生と文系学生では卒業論文のテーマ決定に大きく違いがあり、そのため情報ニーズも異なることが分かった。理系は担当教授から必要な資料を得られる場合が多いが、文系は個人の興味・関心によるところが大きいので独自で資料を探す必要がある。一方で文理問わず、論文データベースの CiNii を良く使い、インターネットが卒論作成のための重要なツールになっていることが分かった。加えて図書館に欲しい資料がなく遠方の図書館に借りに行くものが多いことが分かった。

この考察に基づいて、インターネット上で利用できる論文検索の方法と近辺の公立図書館の蔵書を検索できるツール、また書店の在庫について調べることのできるデータベースを紹介した。加えて、集めた文献管理するためのソフトの紹介も行った。

5.研究の成果と今後の課題

千葉大生は大学附属図書館が提供する学習支援について無関心ではない。しかし、サービスを知っているが利用したことがないという学生も多数いることが分かった。

特に図書館員に依頼するものは、場所を利用するサービスよりも使うことに抵抗があるようだ。「カウンターの職員に話しかけづらい」、「こんな質問をするなんて恥ずかしいことなのでは」という気持ちが強いようだ。これらを乗り越えるような強い情報ニーズを持つことも重要であるが、「利用者が職員に話しかけやすい図書館」になることも重要であろう。サービスを提供するだけではなく、利用者との関係作りにおいても積極的な対応をしていくべきである。

利用者はこれまでの経験の中で慣れ親しんだものであれば自然と利用するが、慣れていないものは選択肢に入りにくい。大学入学時またはそれ以前から、図書館に慣れ親しむことで、学習支援が必要な時に受けられる・受けに行く機会が増えてくるのではないか。知ることと実践のサイクルから利用者の行動は形づくられ、変化していく。学習に関してだけではなく、日常生活においても図書館が関与することは可能であろう。広報の問題に加えて、提供されるサービスを知るだけでなく、使ってみる機会を設けることが重要であろう。紹介するだけではなく、実際に一緒に使ってみて、どんな場面で使用すれば役立つのかという経験が重要であることも事後アンケートより分かった。今後、重要な課題は以下の二点である。

(1)プログラム実施の時期

プログラムを実施したのが 12 月であったため「もっと前にやって欲しかった」という意見が多かった。内容は有益であるが実施時期の不具合のため、十分に活用に至らなかったという感想があった。今回行なったプログラムが別の時期であれば、学生の情報探索行動にどのような影響が出たか、明らかにする必要性がある。

(2)図書館が提供するサービスを活用している学生がどのように活用しているか、その行動モデルについての調査不足。

丁寧な聞き取り調査に基づく千葉大生の図書館利用モデルの作成ができれば、さらに学生の実態に基づく利用者教育が行なえたのではないだろうか。